

〈書評〉

人文学は医療・医学に貢献できるのか

Jacob Stegenga, *Care & Cure: An Introduction to Philosophy of Medicine*, The University of Chicago Press, 2018.

評者：奈須野文槻

「医療・医学の哲学」の入門書であると同時に、「医療・医学」の哲学的入門書。

医療・医学に関する言説は、学術コミュニティを含む多くの人々の注目を長らく集めてきた。健康関連商品や生活習慣病はテレビ番組等でも多く取り上げられ、そして何より 2021 年現在人々は新型コロナウイルス感染症をめぐる議論の渦中にある。生物学や医科学といった感染症やワクチン開発の学術研究において中心的役割を果たしてきた領域は当然、スマートフォンアプリあるいは空間センサーでの接触確認やソーシャルディスタンスの維持を工学的に支援しようとする取り組み、数理的な方法で感染症対策の意思決定を行うための研究など多様な学術領域が今や医療・医学に貢献しようとしていることは疑いようがない。

さてここで人文学に関わる 1 人として私に関心をもったのが、果たして人文学はどのように医療・医学に貢献することができるのかという点である。本書は人文学のなかでも科学哲学の領域に着目して、医療・医学¹を分析した入門的著作である。その分析は哲学コミュニティの内的な議論にとどまら

1 “medicine” に対応する概念として日本語の「医療」や「医学」ではそれぞれ十分ではないため、本書評では「医療・医学」を用いる。また「医学」と「医科学 (medical sciences)」も区別する。

ず、医療・医学の道筋を議論する上での論点を整理するという点で医療・医学コミュニティに貢献しうるものとなっている。

本書の著者 Jacob Stegenga はケンブリッジ大学の科学史科学哲学科に所属する科学哲学者である。科学哲学のなかでもとりわけ医療・医学の哲学や生物学の哲学と呼ばれる領域を専門にしており、本書は彼の医療・医学の哲学に関する2冊目の単著となっている。医療に関係する哲学的な議論としては生命医療倫理学が確立しているが、医療・医学の哲学はそれと共有する問題意識こそあれど、生命医療倫理学ほど分野として確立しているとは言い難い。少なくない思想家・哲学者が医療・医学に関する議論を展開してきたものの、本書のような科学哲学の視点からの著作は少なく、さらに体系的入門書となるとほとんどないと言えるだろう。本書は医療・医学を専門とし、哲学（当然、科学哲学を含む）については学んだことのない学生を主な対象としている。しかし科学の視点なしに語ることはできない今日の医療・医学について、本書による医療・医学を科学哲学の視点から分析することで得られる理解は現実を見落とすことも極端に評価することもなく議論をすすめるため、哲学者に限らない多くの人文学の研究者に役立つだろう。

要約

本書の内容を紹介したい。本書は各章ごとに一つのテーマについて議論し、章末にテーマの論点ごとに分類して参考図書をあげる形をとっている。各章はそれぞれ独立しているものの、基礎概念から認識論的問題へ、そして科学に関わる問題、疫学や保険政策に関わる問題へと流れがあり、時には議論が相互に参照していることもある。本書は第1章から第3章において、医療・医学において中心的な概念である「健康」「病」「死」を順に扱い、続く議論の足がかりとする。

第1章で著者は「健康」の定義として、健康を否定的概念として定義する中立主義（健康とは病がないこと）と自然主義（健康とは生物医学的に異常がないこと）を、ついで健康を独自の価値概念として定義するウェルビーイング論と規範主義を紹介する。そして最後に健康の定義を二分しうる客観主義と主観主義の対立を解説する。本書の入門書としての特徴は入れ子構造になっている対比と医療・医学の実践の場における具体的事例をもって、それ

ぞれの思想をあまり深入りしすぎることなくわかりやすく紹介してくれることにある。著者はそれぞれの健康の定義の利点と限界を指摘するだけでなく、WHO 憲章ではウェルビーイング論が用いられている等、場面に応じて人々がそのような健康の定義を現実に使い分けていることを指摘する。

第2章における「病」も同様に、生物医学的に病を定義しようとする自然主義と人々の価値判断を規準にして定義する規範主義を対立させながら解説する。前者の「病」の定義に対しては治療（Cure）が、後者の定義にはケア（Care）が医療・医学として有効であり、自然主義と規範主義のハイブリッドな病の定義を用いることで、現実に医療において治療とケア両方が重視されていることを説明できると著者は主張し、本書のタイトルはそれに由来すると説明する。最後に哲学の領域からの応答として、「病」概念の思弁的議論の解決を待つ必要はないという消去主義と「病」の当事者的な説明を重視する現象学が紹介される。

最後に紹介される概念は生命医療倫理学とも関わりの深い「死」である。事実、この3章の終わりにある「殺すことの倫理（Ethics of Killing）」の項目は、パーソン論や安楽死/自殺幫助といった生命医療倫理学でも馴染み深い論点が指摘されている。それに先立つ「死」を定義する方法の議論においては、生物学的死と形而上学的死（人格や魂の死）の2種類をあげて、それがどのようにデカルトを始めとする哲学者の論争や脳死をめぐる医療者の議論と関係しているかを説明する。「死の悪さ（The Badness of Death）」についてはなぜ人々が死を避けたがるのかについて、不死や遺言をもとにした思考実験をもとに、死の持つ価値と医療・医学の目的との関係性を指摘する。

第II部「モデルと種（Models and Kinds）」においては理論モデルやそれを分類する方法（生物学の哲学における「種問題」に対応する）をテーマに、主に病について解説する。第4章では3種類の因果関係（十分条件による説明、確率による説明、INUS条件による説明²⁾）と疾病の原因を説明するためにウイルスの感染などの単一因子を想定するか生活習慣等の多因子を想定するかを踏まえて、多様な「病」のモデルが存在することを説明する。その後、

2 「結果に対して不必要（Unnecessary）だが十分（Sufficient）な条件の、不十分（Insufficient）だが必要（Necessary）な部分」が原因であると考えた立場。和文にする際に語順が入れ替わっているが、これらの頭文字をとってINUS条件となる。

疾病分類学とプレジジョン・メディシン（個別化医療とも呼ばれる、疾病に応じてではなく個人に応じて治療法を選択する医療のこと）を精神疾患や皮膚疾患、生活習慣病といった具体例によって論じる。一部の具体例については、論点を理解するために医学史の知識や先進的な治療法に関する知見が必要となるだろう。

病の原因の説明を筆頭に、医療・医学の理論やモデルはしばしば還元主義的であると言われる。しかし、第5章において著者は、還元主義とそれに対するホーリズム両方の側面が医療・医学にあり、それぞれの考え方が医療・医学に成功をもたらしてきたことを指摘する。一方で、還元主義とホーリズムの対立という現象についても、製薬の問題や医師患者関係をもとに説明を加える。しばしば医学＝還元主義と単純化されがちであることを前提に、本章において著者は近代イギリスにおける衛生概念や現代の社会疫学の事例によってホーリズムの意義について多角的に説明・擁護することでバランスのとれた構成となっている。

理論モデルや病の分類の議論の最後は「物議をかもし病（Controversial Diseases）」を扱う（第6章）。このテーマについては、医療化やスティグマ、依存症といった医療社会学における議論とも重なる論点を解説しつつも、その中で過去の章で議論した「病」の定義（第2章）や分類（第4章）の論点に再度触れるとともに、哲学者ハッキングによるループ効果や依存症における自己選択の問題といった哲学的な問を著者は見出していく。

第Ⅲ部「エビデンスと推論（Evidence and Inference）」は著者が医療・医学の哲学のなかでも得意とする領域であり、著者の前著 *Medical Nihilism*, Oxford University Press, 2018. や学術論文の内容が多分に盛り込まれている。医療・医学におけるエビデンスの生み出され方を説明するために、著者は治験における第1相試験～第3相試験の役割や、様々な種類のバイアスとそれを避ける方法を綿密に解説する（第7章）。さらに実験動物を使用した実験やランダム化による実験環境の構築、多数の研究結果を統合して判断するメタアナリシス・根拠に基づく医療（EBM）といった医療・医学に特徴的なエビデンスの構築方法に潜む認識論的な問題を指摘する。章の最後は、疫学的方法や統計学的方法を事例にエビデンスがどのようなメカニズム（機構）観を前提としているか説明する。本章は疫学ないし生物統計学の概説とも言える章になっており、論じられる問題意識は哲学者というよりむしろ疫学者・

生物統計学者のほうが共感できるような内容になっている。

医療・医学の研究についてエビデンスの役割という内的な問題に目を向けた後、著者は「客観性と科学の社会構造 (Objectivity and the Social Structure of Science)」をテーマに医療・医学の研究の外部を取り巻く問題について議論する (第8章)。医学研究を取り巻く金の問題や、科学哲学で言う「線引き問題」(医療・医学とそうでないものの区別をどう設定するかの問題)が取り上げられる。それを通じて明らかになるのは、そもそも科学とは単に真理や正しさを追求する営みではないということだ。著者はこれらの議論を踏まえた上で社会認識論を用いた社会の中の研究、あるいは社会(科学者社会)の中の科学の視点を持つことで、疫学において因果性の評価に用いられることもある「ヒルの規準」の役割や医学における出版バイアスの深刻さといった医療・医学の具体的課題をよりよく理解できると主張する。

上述した「ヒルの規準」は歴史的には、ランダム化試験が因果関係の論証のために必須かどうか統計学者フィッシャーと疫学者ヒルが論争したことに由来する。フィッシャーが主張するように人間を対象としたランダム化試験による因果関係の主張は現代医療においても高く評価されている。一方で著者は「ヒルの規準」や「コッホ則」を事例に、医療・医学における因果推論の運用がフィッシャーの言うほど単純化できないと主張する(第9章)。本章では「外挿」や「リスク比」、「検定」、「頻度主義」といった生物統計学における概念によって説明される課程で、医療・医学の因果推論へのそれぞれの貢献や実践上の問題が紹介され、その上で問題の哲学的理解の方法が提案される。

研究デザインやエビデンスに関する議論をふまえて、著者はより臨床に関係する問題を議論する。第10章では臨床における医療の実践(医療的介入)の効果を測る方法について第1章の健康の定義や第4章における病のモデルの議論によって、いくつか方法を提案する。それとは反対に「治療の効果がない」と考えるある意味で懐疑的な思考の方法について、それを著者の前著の主題である「医療ニヒリズム (Medical Nihilism)」と名付けた上で、思想的な系譜をたどる。著者の説明で大変興味深いのは「医療ニヒリズム」の考え方も、また先んじて説明された効果を測るための考え方も同様に、現代医療を批判し代替医療を擁護するためにも、あるいは代替医療を批判するためにも用いられているということだ。代替医療と並んでプラセボ(治療効果のない偽の薬のこと)についても考察が加えられるが、ここで用いられる

帰結主義やパターンリズムといった医療倫理的な立場については本書ではほとんど説明がなく、また用法も突然であり読者の理解の妨げになるであろう。

第Ⅲ部の最終章はPCR検査方法をめぐる議論によって我々にも身近になった偽陽性・偽陰性の問題を含む「診断とスクリーニング (Diagnosis and Screening)」をテーマに設定している。診断については、その因果推論の方法や疾病分類が従来の哲学においても重要な問として扱われてきたことを主張しつつも、その議論は本章以前の章で十分であるとされ哲学に関する説明はやや少ない。代わりに本章で扱われるのが先述の個人に対する検査の問題と、人口集団に対する“検査”としてのスクリーニングの意義である。

第Ⅳ部は哲学に代表される多くの人文学研究による「精神医学」の議論の積み重ねを本書における医療・医学の哲学と対比する章と、「政策」や「公衆衛生」といった医療・医学をめぐる制度や社会問題について医療・医学の哲学の可能性を検討する章に分かれる。「精神医学」については多くの哲学者・人文学者による研究が歴史的になされてきただけでなく、診断基準であるDSM³の改訂や治療方法をめぐり医療・医学の中からも哲学に関係する論争が起きてきた(第12章)。精神医学の哲学において重要な役割を果たしてきた理性や意識の哲学的分析にはあまり触れられないものの、「狂気」の歴史や反精神医学、抗精神病薬の誕生といった精神医学の歴史を簡単に解説した上で、本書にて紹介されてきた医療・医学の哲学の概念を用いて同等の議論を展開することを著者は試みている。

続く第13章と第14章では、科学哲学的視点を少し離れて社会哲学や政治哲学の観点から「政策」と「公衆衛生」の現状の課題を分析する。医療・医学の政策として扱われた研究の優先順位(研究費の分配問題)、知的財産権の正当化、規制のための規準の3テーマはややまとまりが欠け、それぞれの項目ごとに社会哲学・政治哲学の用語(例えば、社会主義やロックの所有論)が矢継ぎ早に新しく出現する(第13章)。しかし、後発医薬品・Me-tooドラッグといった医療従事者に馴染みのある具体的事例によって読者が読みやすい

3 アメリカ精神医学会による作成された精神疾患の診断・統計マニュアル (Diagnosis and Statistical Manual of Mental Disorders) のこと。現在は2013年に改訂された第5版が最新版になる。

ような工夫がされている。

最終章で著者は公衆衛生や社会疫学の隆盛をふまえて、医療・医学における「社会」という概念の影響が増していると主張する。このトレンドによって健康寿命が伸びるなど社会がより健康になることもある一方で、QOLの考え方によってプライベートな生活までもが医療の対象となってしまうたり、健康や寿命に明白な格差が存在することが明らかになったり、新たに見つかった問題があることを指摘する。

本書には内容を総括したり、著者による今後の医療・医学あるいは医療・医学の哲学の見通しが説明されたりする章はない。しかし、著者のウェブサイトにおいて本書を用いた授業のサンプルシラバスが初級向け（学部生向け）、上級向け（大学院生向け）の2種類紹介されており⁴、本書を通じて医療・医学の哲学を盛り立てていこうという著者のモチベーションを感じる。

コメント

上述したように本書は、科学哲学の視点からの医療・医学の哲学の入門的概説書という類を見ない著作である。医療・医学への関心は従来の人文学においても低くはなかったものの、新型コロナウイルス感染症のパンデミックをきっかけにして人文学者も医療や公衆衛生について論じるようになり、講義でも触れる機会がさらに多くなった今だからこそ本書は必要とされるだろう。2018年に書かれた本書の議論の射程は、感染症で激変した現状を十分カバーし、アフターコロナやウィズコロナと予想されるような将来でもその有益さは失われないだろう。また「A対B」という二項対立を積極的に説明のため導入しつつも、医療・医学が「AかつB」や「Aであり、かつAでもない」の両面性を持つことを主張する姿勢は現実の重要視とともに、概説書としてのバランスの良さにもつながっている本書の魅力の一つである。人文学の立場から、医療の発展や医学の研究の多様な可能性を提案する見本にもなりうる。さらに説明のため取り上げられる具体的事例は、科学哲学の研究者になる以前は公衆衛生や医科学に関わっていたという筆者の医療・医学の歴史及び現在の潮流を捉える優れた感覚あってこそであり、本書の「医

4 <https://www.people.hps.cam.ac.uk/index/teaching-officers/stegenga> 最終アクセス：2021年2月11日

療・医学を学ぶものに哲学を届ける」という狙いの達成には欠かせないものとなっている。

ただし、本書に非の打ち所がないわけではない。長所として先述した医療・医学の具体的事例は、裏を返すと医学史や現代医療の問題に関するある程度の理解がないと解釈が難しいこともある。本書では多くの医療・医学の用語の概念分析に先立って用語解説が施されているものの、概念分析の対象にならない用語については説明が不十分であったり、数多くの医学史の事例の中からその事例を選択した理由も明らかではなかったりすることがある。また医療・医学の哲学に特化した入門書であるゆえに、生命医療倫理学や心の哲学との関わりを見落としてしまっている、あるいは省いてしまっている点がある。そして、科学哲学の視点からの入門書であるゆえに、倫理学や道徳哲学、政治哲学が重要であるように示唆されている第IV部の議論は中途半端なところがあり、科学哲学単体での視点の限界を感じさせる。本書全体としては医療・医学の哲学の可能性を示すように広範な議論をカバーしているものの、平均寿命や新型コロナウイルス感染症の対策における病床使用率といった指標や統計量の問題は、医療の意思決定の現場や健康格差、科学哲学における測定の問題と関係するにも関わらず本書ではエビデンスや公衆衛生の章で軽く触れられるのみである。また医療従事者の免許制度や医師の社会的地位といった医療・医学に関わる人間の問題について本書は指摘することがなく、せつかくの具体的事例がリアリティを損なう部分もある。

しかしながら以上のような批判を踏まえても、本書は医療・医学の哲学に初めて触れる人や、医療・医学に対して関心を持つようになった人文学の研究者にとって有用であろう。フランスを中心としてカンギレム、フーコー、近年ではシャマユーに代表されるような伝統を持つ医学を題材とした思想的研究や、アメリカを中心に制度化された生命医療倫理学の実践と理論については入門書・概説書を含む多くの和書がすでに出版されている。しかしながらこれまで、本書のように医療・医学の専門家と哲学者が対話可能な形の議論を、科学哲学の道具によって整理し解決を図るような「社会派科学哲学⁵」とでも言うべき著作はなかった。

本書は現実の医療・医学の問題に対して人文学が無力ではなく、むしろ貢

5 伊勢田哲治. 2020. 「第7章 科学哲学の方法」, 藤垣裕子責任編集『科学技術社会論の挑戦3「つなぐ」「こえる」「動く」の方法論」, 東京大学出版会.

献する可能性もあることを示唆してくれる。今まで医療の当事者間で行われてきた論争を哲学に開き、哲学の抽象的だった議論を現実的な医療の課題へと変貌させることで本書は哲学者と医療・医学の当事者のさらなる協働を助けるだろう。その結果、ますます盛んになるであろう医療・医学の哲学の研究の発展を、著者と同じく医療・医学を研究対象にする1人として期待したい。

文献紹介

本書評の最後に本書は類を見ない入門書と言ったものの内容面や関心領域で近い部分もある入門的文献や、本書の欠点を補えるような概説的な副読文献を紹介したい。

まず哲学分野では親しまれているオンライン哲学辞典 *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (SEP) にも医療・医学の哲学 (Philosophy of Medicine) の項目や病及び健康の概念 (Concepts of Disease and Health) の項目がある。とくに前者は科学哲学との関係の重要性を指摘するなどのモチベーションや内容の構成方法など、本書と非常に似ている。ウェルビーイングや精神疾患の項目もあるため SEP 全体で見れば高い網羅性を持つものの、それぞれ項目の担当者が異なることによる一貫性の無さや医療・医学の哲学という視点で全体が構成されていないゆえの漏れ、項目によっては医療・医学よりも哲学の論争や研究史的な説明を重視する姿勢といった欠点がある。しかしながら、前述2つの項目は本書と併読することで相乗効果があるだろう。

和書について科学論の観点から医学を主題にすえた哲学の書作では杉岡による著作がある。『哲学としての医学概論 方法論・人間観・スピリチュアリティ』(春秋社, 2014年) が彼の医学哲学の概論書になり、『医学とはどのような学問か 医学概論・医学哲学講義』(春秋社, 2019年) が入門書になる。Stegenga の本書は彼の前書の内容を踏まえた議論がありつつも基本的には彼に限らない様々な論者の医療・医学哲学を紹介している一方、杉岡の著作では医学の実学的側面や総合的な人間観、スピリチュアリティを中心にして、基本的にオリジナルな議論が展開される。しかしながら、医療・医学の科学論を健康観や人間観に関する思想的議論を踏まえた上で展開する姿勢や、医学哲学をもって現代医学の諸問題の解釈する姿勢は共通しており、先行研究の解釈も含んで日本語で読める数少ない医学哲学の著作の一つであ

る。また大変興味深いことに、それぞれが独自にニヒリズムをキーワードにして現代医療・医学、とりわけ医科学の問題を読み解いており、その対比も面白いだろう。

医療・医学全体を対象としていないものの、石原孝二『精神障害を哲学する 分類から対話へ』（東京大学出版会、2018年）は分析対象を精神障害に絞ることで哲学史・医学史についても十分に解説した上で、現代の精神医療の問題や歴史的な疾病分類の議論を理解することができる優れた著作である。書評にもあるように精神医学の哲学は分野として独立して発展しているが、病理学における病の概念史や診断の方法など医療・医学の哲学と共通の問題意識も多い。

最後に本書を読む上での医療・医学の歴史及び現代の問題が前提として必要とされているという欠点を補うことで、本書をよりよく理解するための副読本を紹介する。医学史については欧米の事例を中心に治療法だけでなく疫学的な推論や衛生論も扱うため、William Bynum（鈴木晃仁・鈴木実佳訳）『医学の歴史』（丸善出版者、2015年）が良いだろう。イギリスの医学史の第一人者によって書かれた、とくに近代以降に重きをおいた医療・医学の通史である。また医療・医学の現代の問題については東京大学医学部健康総合科学科編『社会を変える健康のサイエンス 健康総合科学への21の扉』（東京大学出版会、2016年）が本書で扱われる課題の多くをカバーしている。直近の著作になるが大脇幸志郎『「健康」から生活をまもる 最新医学と12の迷信』（生活の医療社、2020年）も、批判的立場から現代医学を紹介する良著である。これら文献で触れられる以外にも、新型コロナウイルス感染症によって未だ多くの医療・医学の課題が社会に残っていることが明らかになった。そんな中この書評及び文献の紹介が、人文学を通じて医療・医学に貢献し、新型コロナウイルス感染症以降の社会をより良くしようとする読者の関心を沸き立たせることができれば幸いである。

謝辞

本書評の執筆及び本書の講読に際して中芝健太、上嶋大樹、東宙、白土航大の各氏から有益なコメントを頂いた。とりわけ医療・医学の専門職として教育を受けた当事者としての本書の評価や、医学および公衆衛生学の視点からの批判に感謝したい。

[文献]

- Cooper, Rachel. 2007. *Psychiatry and Philosophy of Science*, Routledge. (伊勢田哲治・村井俊哉 訳 . 2015. 『精神医学の科学哲学』, 名古屋大学出版.)
- Reiss, Julian and Rachel A. Ankeny, “Philosophy of Medicine”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2016 Edition), Edward N. Zalta (ed.), <https://plato.stanford.edu/archives/sum2016/entries/medicine/>. access:2021/2/11
- Stegenga, Jacob. 2018. *Medical Nihilism*, Oxford University Press.
- Stegenga, Jacob. 2018. *Care & Cure: An Introduction to Philosophy of Medicine*, The University of Chicago Press.
- William Bynum. 2008. *The History of Medicine: A Very Short Introduction*, Oxford University Press. (鈴木晃仁・鈴木実佳訳 . 2015. 『医学の歴史』, 丸善出版者.)
- 石原孝二 . 2018. 『精神障害を哲学する 分類から対話へ』, 東京大学出版会 .
- 大脇幸志郎 . 2020. 『「健康」から生活をまもる 最新医学と 12 の迷信』, 生活の医療社 .
- 金森修 . 1999. 「健康という名の規範」『科学哲学』 32 巻 2 号 , pp.1-13.
- 川喜田愛郎 . 2012. 『医学概論』, 筑摩書房 . (川喜田愛郎 . 1982. 『医学概論』, 東興交易医書出版部.)
- 児玉聡 「第 6 章 公衆衛生政策の政治哲学的基礎」 赤林朗・児玉聡 編 『入門医療倫理Ⅲ 公衆衛生倫理』, 勁草書房, 2015 年 , pp.115-119.
- 小松美彦・香川知晶 編 . 2010. 『メタバイオエシックスの構築へ 生命倫理を問いなおす』, NTT 出版 .
- 杉岡良彦 . 2014. 『哲学としての医学概論 方法論・人間観・スピリチュアリティ』, 春秋社 .
- 杉岡良彦 . 2019. 『医学とはどのような学問か 医学概論・医学哲学講義』, 春秋社 .
- 東京大学医学部健康総合科学科 編 . 2016. 『社会を変える健康のサイエンス 健康総合科学への 21 の扉』, 東京大学出版会 .